キラリ十和田人（とわだびと）

— 第26回 —

力では男性に届かない 自分ができることを 精一杯やるだけ

水尻（みずしり） 沙希（さき）さん

PROFILE

十和田市出身。弘前大学卒業と同時に消防職員として十和田市に採用される。青森県消防学校での初任教育を経て、昨年11月、十和田消防署第１隊予防係に配属。小学校から大学までバスケットボールを続けた。休日は筋トレのほか、得意の裁縫などをして過ごす。

「男性と同じ訓練メニューをこなしてよく頑張っているから、特別に気を使うことはありません」所属する十和田消防署の小林元紀予防第1係長にそう言わせるのは、昨年誕生した、十和田市初の女性消防士、水尻沙希さんだ。

消防士を志望したのは体育系の学科を専攻する自身にとって、ごく自然な選択だったという。「体を生かして地元で働きたかった。採用試験に合格してから十和田市には女性消防士がいないと知りました」とはにかむ。

消防士になって丸1年。体力には自信があるが、ロープ登りなど訓練の中で男女差を感じることもあるという。湧き上がる向上心。非番にはトレーニングに励み、力がついたと実感すると嬉しくなる。

「女性消防職と聞けば、救急業務が想像されがちですが、私は消防隊として活動したい」とキッパリ言う。消防車を運転し、水出しなどの機械操作を担う機関員として出動するのも目標の一つ。

職場の雰囲気については「24時間厳しい所だと覚悟して入りました。困難な状況を想定して行われる訓練はとても厳しいですが、普段の皆さんは気さくに接してくれる」と良好のよう。

小林係長は「我々は組織で活動します。男でも、女でも、個々を高めて、協力しながら任務を遂行します」と期待を込めて見守っている。

日々の仕事はメモを取りながら吸収する毎日。徐々に消防に関する法律も覚えてきた。

「技術と知識をしっかり身に付けて、職場と、地域のかたがたに信頼される消防士になりたい」と春空の下で、瞳が輝いた。

水圧がかかる管鎗（かんそう）を長時間保持して放水するには相当の体力が必要です

朝の点呼では車両・装備を点検し整列